様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４４２３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００２９６

研究課題名（和文）『洗心洞詩文』所収詩の全注釈ならびに大塩平八郎をめぐる幕末期詩壇の研究

研究課題名（英文）Complete commentary on the poems included in "Senshindo Shibun" and research on the poetic circle at the end of the Edo period surrounding Heihachiro Oshio

研究代表者
福島　理子（Fukushima, Rinko）

帝塚山学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：４０３０９３６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず『洗心洞詩文』所収の全詩に訓読、注と訳を施した。また、資料として、詩軸3点（刊本未所収詩3首）に加え、新たに屏風1点と詩軸3点の詩22首（刊本未所収詩12首）を得た。
大塩は自らを屈原を髣髴とさせる憂人として他者の眼に触れることを想定し、詩稿をまとめたと考えられる。詩では直截的な世情批判は抑えられ、隠微に示す漢詩独特の筆法が駆使されている。その一方で、風流を愛する文人としての側面も見せており、彼の新たな一面が窺える。大塩事件は儒者たちに自らの思索や理論を実践することの意義を問いかけたが、近代に至ると、石川淳の小説に物語のしかけとして取り込まれるなど、幅広い展開を見せる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大塩平八郎について、従来、与力としての業績、陽明学者としての著述、最期の決起とそれに至る行動を基に多面的に論じられてきたが、彼が残した詩賦は等閑視されてきたと言わざるを得ない。しかし、近世後期屈指の文人であった頼山陽、田能村竹田、篠崎小竹、岡田半江とともにあって、彼の詩は高いレベルを保っており、また、その表現からは、他の資料からは窺えない大塩の思想、感情、志、美意識を読み取ることができる。また、刊本以外の自筆資料と突き合わせることによって、新たな情報が読み取れる。今後の大塩研究においては、彼の詩が踏まえられることが必須である。本研究によって成した訳注を2024年中に公刊したい。

研究成果の概要（英文）：In this study, I made the Japanese classic reading, annotated, and translated all 145 poems in Heihachiro Oshio’s poetry collection:"Senshindo Shibun." And, I found one folding screen and three scrolls, or 22 poems, as materials. Among these are 12 poems being introduced for the first time.
It seems that Oshio wrote the draft of poems with the intention of seeing himself as a character reminiscent of Qu Yuan. In Oshio’s poetry, direct political criticism is avoided, and instead a subtle style unique to Chinese poetry is used. These poems show his side as a man of letters who loves elegance and beauty.The uproar he caused made Confucian scholars question of whether to put their ideas and theories into practice. And in modern times, it has been variously varied, for example being incorporated as a plot device in Jun Ishikawa's novels.

研究分野：日本近世文学

キーワード：大塩平八郎　洗心洞詩文　頼山陽　広瀬旭荘　篠崎小竹　岡田半江　石川淳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

大塩平八郎は、大阪町奉行所の与力であるとともに、陽明学を奉じる儒者であり、かつまた詩人でもあった。大塩の人となりと行動については、明治期から幸田成友や森鷗外が評伝を著し、爾来膨大な研究が重ねられて来たが、彼が賦し残した多くの詩を正しく読み、漢詩文という文体の存在意義でもある典故との意味合いを勘案した上で、正しく解釈し得たものは無いと言ってよいし、正しい読みのもとに彼の賦作を立論の資としているものはほとんど見られない。

大塩平八郎の別集である刊本『洗心洞詩文』には 145 首の漢詩が収められており、既に訳注が一通り施されてもいる。それらは実に真摯に取り組まれたものではあるが、漢詩文の研究を専門とする研究者によって成されたものではないため、あまりに誤読が多い。そもそも漢詩に訓読を施し、その表現の背後にある典故を洗い出した上で、重層的な意味を読み取るという注釈方法は、漢詩文が日常の表現方法ではなくなった現代において、専門的な訓練を経た者でなければかなわないものと断ぜざるを得ない。しかるに、おそらく今後も大塩平八郎を研究対象とする者の多くは、日本史研究、思想研究に携わる研究者であって、漢詩文を訓釈するテクニックを有する者は稀であろう。とするならば、それらの後続の研究が誤った訓釈をそのままに利用して行われる危険性があり、それは、大塩平八郎という、徳川末期最大の社会的事件に関わる存在の研究を損なうことになりかねない。

２．研究の目的

①大塩平八郎が、その詩において何をどのように表現していたのか。②大塩の詩に、彼が行動を起こすまでの思想的経緯をたどることはできるか。一方、それが詩という文学作品である以上、彼独特の美意識をそこに見出しうるのではないか。その美意識は、同時代の詩人、画人らと共有されるものであったのか。③大塩の乱という、空前の事件の報に接し、同時代の詩人・儒者らはいかに衝撃を受け、いかなる思いを持ったか。それは、後の文学作品にいかなる影響を及ぼしたか。④頼山陽や広瀬旭荘ら日本漢詩史屈指の詩人を擁する漢詩の爛熟期にあって、大塩の賦した詩はどのように評価し、位置づけることが可能か。以上の問いのもとに、研究を進める。大塩の詩を正しく読み解くことによって、大塩の内面を窺うとともに、彼の作品を思想家ではなく詩人のそれとして近世漢詩史に位置づける。また、彼の詩に正しい訓読を施し、注釈を備えてその真意を明らめることによって、今後もなお活発に続くであろう大塩平八郎研究の場に供したい。

３．研究の方法

①大塩平八郎の『洗心洞詩文』所収漢詩のすべてに正確な訓読と注釈を施す。また、『洗心洞詩文』に収められていない詩文を捜索し、同様に訓読と注釈を施す。

②大塩が思索する知識人であることを捨て、行動する知識人たることを選ぶに至る道程はいかなるものであったか。詩中の表現を、中国及び日本の詩人・儒者らの言説と照らし合わせるという、スタンダードではあるが、実証的な方法で、大塩の内面を丁寧に追っていきたい。

③天保期の儒者、また、幕末期から明治期の儒者について、大塩事件を意識したと思しい詩文を捜索し、彼らの評価について考察する。また、幸田成友や森鷗外らが大塩の評伝を記しているが、彼の行動や思想が近代文学に与えた影響はそれに止まるまい。しばしば大塩に言及している石川淳や幸田露伴に注目し、大塩ないし近世後期の儒者の思想が近代作家の作品の奥深くに関わっていく可能性を探りたい。

④大塩はその行動によって、あるいは陽明学者として評されて来たが、詩人としての評価は受けて来なかった。交友のあった頼山陽、篠崎小竹ほか、広瀬旭荘ら同時代の儒者・詩人達の詩文を対象として、大塩と詩文との比較を進めていく。また、彼は岡田半江や田能村竹田ら、文人画家との間にも交友関係や影響関係のあることが分かっている。同時代の文人の詩文、書画と比較しつつ、「文人」としての大塩平八郎を考えてみたい。

４．研究成果

（１）『洗心洞詩文』の世界―刊本と遺墨

①刊本『洗心洞詩文』詩の訳註

本研究において明治 12 年（1879）刊『洗心洞詩文』詩部所収詩全 145 首について、訓読、注、現代語訳を施した。まずは、その注釈の過程で得たことを述べておこう。

刊本『洗心洞詩文』の成立の経緯は、現段階では追うことができない。しかし、詩部の巻頭の識語に「原本を写録するに誤り無きを免れず」（原漢文、以下同）とあることから、編集者の中尾捨吉が、遺墨の類、すなわち詩軸や書簡、詩箋等から本文を集めたのではなく、現行の形に近い詩稿から版下を起こしたものと推測される。もし、遺墨を収集したのであれば、その収集の過程について記されるのが、当時の詩集の序文における通例だからだ。

一方、実際に刊本を読んでいくと、字句の誤りが散見される。これについては、前掲の引用のとおり編集者自らが断っていることではあるが、その中には押韻部分の誤記や意味を損なうレベルの誤記が少なからず含まれる。たとえば、韻字が上平声十一真である「法隆親王の龍田懐古

を賦せしむるに応ず」詩において「秋旻」とあるべきところが「秋昊」とあったり、「蜂窠」（ハチの巣）と対に用いられている以上「蟻垤」（アリ塚）とあるべきところが「蟻蛭」（アリとヒル）となっている（「常に北山を望むも未だ登ること能はず。一日願の如く其の最高を踏む。偶たま之を得」）類だ。いずれも容易に正しい文字が推測できることから、版下を起こした者、おそらくは編集者が、大塩の詩を熟知しておらず、かつ、自ら漢詩を充分に良くする者ではない蓋然性を示している。

それにも拘わらず、識語に「誤字を漫りに改むべからず」と言うのは、無条件な大塩への尊崇の意を表すものだが、大塩の真意を正しく理解するためには、こうしたあからさまな誤りを、刊本の記述は示した上で、修正する要がある。

では、大塩はどういう目的で詩稿を残したのだろうか。果して自らの詩集を公刊する意図があったのだろうか。実のところそれは不明だが、自筆資料と比較することによって、詩稿の取りまとめに当たって大塩に一定の作意があったらしいと見えてくる。このたびの研究の過程で得た新出資料については、後に述べるが、たとえば、その中の一つに七言詩 12 首を記した、八曲の屏風がある。この屏風に記される詩は、刊本所収のものであるが、詩題や本文に異同がある。また、それぞれの詩の制作時期や制作の背景には隔たりがある。同一の状況で記されたものではない詩が、一隻、あるいは一扇、一紙に合わせられるという場合、そこには、その屏風なり詩軸なりを新たな作品として提示する作者の意図があると考えてよい。そのことは、後述するように、広瀬旭荘が作成した対句屏風の検討によって証している。

たとえば、刊本に「友人宅を訪ふ。多種の草花適たま開く。即事を賦す」という七言絶句がある。この詩は、屏風では「橋本宅を訪ふ。庭前に多種の草花適たま開く。即事を賦す」という題で記されているが、屏風では起句に「檐前窓外薬花開く」とあるのが、刊本では「檐前窓外薫蘭開く」となっている。屏風の詩は大塩の腹心である橋本忠兵衛に寄せたもので、「薬花」（しゃくやく）が咲いているとあるのはおそらく実景であろう。それが刊本では「薫蘭」（香草のラン）となっているのをどう見ればよいのだろうか。

『洗心洞詩文』に並ぶ詩には、彼が大川から淀川べりを散策した折の興に沿って作られたものが多い。彼は実際日々、出勤前の早朝、或は退勤後の夕刻に河畔を散策しており、それは沿岸の景物に触れて思索を深め、また、河水の増減に民のくらしを憂うるひと時であったようだ。しかし、そのような生活が実際にあるということと、自分自身を詩中に描くということとは全く別個の営みだ。『洗心洞詩文』において、大塩はある一人の面影をやどして登場する。それは、楚の屈原だ。改めて述べるまでもないが、楚の宰相であった屈原は、誠を尽くした進言も退けられ、朝廷から追われて長江のほとりをさすらった末、汨羅に身を投げて亡くなってしまった。大川べりを散策する大塩の詩には、屈原の詩を収める『楚辞』の表現がよく用いられている。「友人宅を訪ふ。多種の草花適たま開く。即事を賦す」詩で、あえて「薫蘭」が選ばれているのも、それが屈原の最も愛した草であり、高潔な彼を体現するものとして周知されていたからだろう。

『洗心洞詩文』ならびに、その元となる詩稿は、大塩の賦した全ての詩を収めたものではない。収められなかった詩が、必ずしも大塩自身が描こうとする自らの姿にそぐわなかったとは言えないことは、刊本未所収詩の検討からも明らかではあるが、『洗心洞詩文』には、屈原を髣髴とする憂人、世に容れられず孤独を深めて行く人物の悲歌としての作意があったと言えるだろう。

②新資料の捜索

刊本『洗心洞詩文』所収の詩あるいは本文と異なる資料として、刊本未所収の成正寺所蔵「城州の笠置山に上る、旧製」詩軸、「甲午正月十有三日野外に歩き、感ずる所有りて之を餞り、平松君の需めに応ず」詩軸、「春日江頭に酔ひて帰る、偶成」詩軸に加え、現在大阪歴史博物館に寄託されている大塩自筆詩八曲屏風、科研費により購入した大塩自筆詩軸、個人蔵の大塩自筆詩軸 2 点を得た。

大塩自筆詩八曲屏風に所載の七言詩 12 首は、その中七言絶句 9 首が刊本所収のもの。ただし、字句の異同がある。中、七言律詩「新春野外に遊ぶ、豪韻を得る」1 首が刊本未所収の作。中 2 首が明・陳敬章の七言絶句。購入詩軸所載の七言絶句「出游の帰途星月の池水に映ずるを看る」2 首は、第一首が刊本所収のもので、字句の異同がある。第二首の「羲一郎に与ふ」の作が刊本未所収。個人蔵詩軸 2 点は、その中 1 点が七言絶句「洛江の上にて雨に遇ふの作」と「歳暮記事」の 2 首を載せ、これらはいずれも刊本未所収。もう 1 点が「虚堂に嬾を養ひ」で始まる詩を含め七言絶句無題詩計 8 首を載せ、これらいずれもが刊本未所収。すなわち、計 15 首を刊本未所収詩として得たことになる。残りの詩は刊本所収のものとは言え、むしろそれらの字句の異同によって教えられるところが少なくない。

詩軸および屏風等の肉筆資料には、作詩の経緯を窺える情報が刊本よりも多い。その理由としては、①で述べた通り、刊本の詩稿において当座性が薄められ、詩稿全体の世界観が重視されている点、また、明治期に大塩の評価が変化したとは言え、毀誉褒貶相交わる彼の近親者として、関係者が特定されるのを避ける意が働いた点も考えられる。ただし、後者については、たとえば刊本に岡田半江の名が明記されるように、完全な操作とは言えない。とは言え、当座性が薄められているということは、詩稿が、自らの覚書というよりは、他者の眼に触れることを想定してまとめられたことを示唆している。

肉筆資料のうち、屏風に記された詩は、それぞれの制作時期も制作背景も異なっているが、その選定と配列には一定の意図が含まれており、たとえば、異なる 2 首が 1 扇に合わせられた場合、その対比によってそれぞれの詩の隠された意図が浮かび上がることがある。

『洗心洞詩文』には、陽明学者としての彼の本領を示すような、抽象的な内容の詩は必ずしも多くない。購入軸に含まれる新出の七言絶句は、『洗心洞箚記』に記される天と人との関係、また、彼の太古への憧れが述べられており、彼の哲学をイメージとして捉えられるところが、極めて興味深い。

（２）隠微に仕込まれた批判性

『洗心洞詩文』には、民の暮らしを憂え、世の汚濁を嘆く詩が多いが、あからさまに権力者を批判するようなものはない。同時代の詩人と比較した場合、たとえば、京で活動していた中島棕隠の世情批判、政道批判の方が、はるかに直截的で痛烈だ。あるいは、当時江戸にいた梁川星巌の方が批判性、時事性が顕わだ。もちろん、大塩に批判の意図がなかったわけではない。ただし、それは詩法として、極めて周到に隠されている。

例として「村舎を過りて蕣花を見る」詩を見てみよう。この詩は、一読すれば、郊外の民家に植えられた朝顔の花の艶やかさを詠うもののようだ。しかし、朝顔の艶やかさを表現する「紅妖紫艶」の語に、宋・趙希鵠『洞天清録』の記述を重ねると、大塩が朝顔を「宜しからざる」花とみなしていることが分かる。文化年間、大坂から変化朝顔の栽培が始まり、文政期にかけて一大ブームとなった。とはいえ、奇種の栽培は金持ちに許された贅沢な遊びで、当時大坂を代表する栽培家の一人に殿村茂斎がいる。殿村は屋号米屋。当時屈指の富商であるとともに風流人で、煎茶、和歌をよくした。彼は、和歌の師村田春門を介して、当時大阪城代だった水野忠邦とも親密な関係にあった。後に大塩は、文政八年の決起に際して建議書を江戸に送っているが、その建議書で「無尽」講を利用した不正に与ったとして指弾される一人が水野だ。そして、大塩勢が放った火は、内平野町の米屋も焼くことになる。

後述のように、大塩は風流を尊んでいるが、世渡りと絡み合うような文事は強く憎んでいる。本詩に仕込まれた批判性は見えにくいが、変化朝顔ブームの浮薄さ故に朝顔を忌避したことは、当時の人であれば容易に分かっただろうし、茂斎―春門―水野のラインにも思い及んだ人はいただろう。少なくとも、大塩の周囲にあった人であれば、気づくことができたはずだ。典故のある表現を用いて分かる者にのみ分かり得る形で示す、漢詩独特の筆法を駆使したものと言える。

（３）同時代及び後代の文学に与えた影響

大塩事件は同時代の儒者たちに大きな衝撃を与えたが、その時点で彼に肯定的な評価を与えた詩を江戸時代に見ることはできない。広瀬旭荘が「坂本君の鍪笠に題す」（『梅墩詩鈔』三篇巻一）詩において大塩事件に関わる意見を述べていることを前に論じた（「「大塩」後の大坂」、鶴崎裕雄編『地域文化の歴史を往く』和泉書院、2012）が、それは事件の鎮圧に功があった坂本鉉之助側の立場で賦作されている。旭荘は大塩を「巨猾」と呼び、火を受けた豪商たちを「良民」と呼ぶ。無論その当時、大塩の行動を「義挙」と称することなど許されないし、無辜の人にまで被害を及ぼしたのも事実だ。しかし、旭荘詩の中には、大塩にせよ坂本にせよ、行動することのできた知識人への羨望がある。大塩と親しかった篠崎小竹は、安中藩板倉勝明の下問に答えて、「寇賊の起こるは游民の多きに由る」と、政治の責任に触れている（「節山板倉侯に復す」『小竹斎文稿　天保七年～天保九年』）。当時江戸にあった梁川星巌は「詠史」（『星巌集』丁集巻三）と題して、中国の歴史を詠む形で韜晦しつつ大塩事件を評するが、大塩の蓄積してきた学殖が無謀な行動により台無しになったことを嘆く。いずれにせよ、大塩の行動への一定の理解があるが、勿論、その行動を是とはしない。ただ、大塩の行動は、儒者として積み重ねてきた思索や理論を、世の中で実践することの意義、実践しうるかどうかへの問いを彼らに投げかけたということは確かだ。

江戸期から明治にかけて、宋学を報じていた儒者たちの思想に通底していたのが大義名分論だ。朱熹が重んじた君臣の義は、江戸中期から後期にかけては、基本的に歴史を見る際の指針だったが、正統な君主が国の主導権を握るべきことを説くがゆえに、幕末維新期には討幕の正統性を保証することになった。大義名分に沿った生き方とはいかなるものかを示すべく、それを体現した人物を集めて称揚した『靖献遺言』（1687 年）は、山崎闇斎学派の儒者浅見絅斎によって記された。同書は、学派を超えて普及し、極めて大きな影響を与え、明治維新後も版を重ねて読まれた。

明治期になると、大塩の行動は幕政に異を唱えたものとして称賛されるようになるが、大塩自身に幕府政治を非とする意は全くなかったと言ってよい。行動のねらいは、幕政を正すためにある。確かに、大塩の詩には、「法隆親王の龍田懐古を賦せしむるに応ず」のように王家への接近の跡が見られるが、彼の王朝への敬慕は、天皇親政を求めるものであったとは言えない。「九月一日、加茂祠前を経」詩に「何物か能く太古の意を存せんや、只だ看る鴨水一溪の清きを」と、あるいは、新出資料「出游の帰途星月の池水に映ずるを看て詩を賦す。前に置くは桜廟即事。後に置くは義一郎に与ふ。宜しく其の本心の霊を失はざるべし。是れ其の学問なり」の第二首に「水清く地静かにして一番新たなり、奚ぞ異ならん羲皇已に上辰なるに」と詠うように、人々が平和に暮らした純朴な太古への憧れがあったと考えられる。石川淳は、大塩の掲げた「神武帝御政道」が「勤王」を標榜するものではなく、究極は堯舜の時代にまで遡る太古への復帰を謳ったものだと言う（「革命家の夢」）が、それは真に当を得たものとみなされる。

石川淳の小説「二人権兵衛」（1961 年）は、キツネが一人の権兵衛にとり憑いて、もう一人のキツネ狩りの権兵衛に復讐する物語だ。この物語は、大塩事件のあった天保 8 年 2 月の翌月に設

定されているが、最後のクライマックスとなる豊年踊りの騒乱は、正しく大塩事件の騒乱をなぞっている。この物語のしかけである首のすげ替えやダキニの法は、いずれも大塩本人に関わるものとして巷間の噂話にあったものを取り込んでいる。荒唐無稽な物語ではあるが、石川は祝祭にも似た大塩一党の破壊を、狐の得意とする幻影で以てそこに再生させた。その中で、搾取されたものが復讐を果たしているのであり、それは大塩によって引き起こされた騒乱の本質を捉えていたのではないか。

（４）大塩の文人性

架蔵の廣瀬旭荘筆七言対句六曲屏風一双は、異なる詩から対句だけを切り取り、並べたものだが、いずれの聯も、『梅墩詩鈔』において高評価を得たものばかりが選ばれている。しかるに、屏風全体を改めて眺めてみると、それぞれの句が原作とは異なった風貌を見せてくる。韻が揃わないため、これを以て一つの詩とみなすことはできないが、六つの聯が結ばれると、世に倦み宿志から遠ざかりつつ、なお諦めきれない一儒生の姿が髣髴とするように配置されていることが分かる。例えば、「石匣已に開くも剣気無し、城濠未だ涸れず龍腥有り」の二句は、原詩においては廃墟を描く意が前面に立つが、本屏風においては他の句の意を受けて、石の箱に収められた剣も堀溝に潜む龍も詩人の鬱屈した思いの比喩として在る。つまり、旧詩あるいは旧詩句の揮毫が、テキストを新たな文脈で再生させる。大塩の自筆資料についても、『洗心洞詩文』に載る本文と軸装、屏風装の資料とが異同を持ち、異なる詩意を展開させていることがあるのは、（１）①で述べたとおりだ。

前述のごとく、『洗心洞詩文』に収められる詩の多くは、世を憂うる大塩の思いが託されているが、それとは打って変わってディレッタントとしての一面をうかがわせる詩も少なからず見られる。

たとえば「江行雨に遇う」詩だが、雨の日に大川を眺めて詠われた大塩の詩の多くが、水害を恐れるものであるのに、この詩は「漣漪化して万珠と為りて躍る、戸を閉ぢて人の奇景を玩ぶ無し」、すなわち、さざなみを立てていた川面には一転して千万もの玉がはね踊っている、このおもしろい景色を誰も見ようとしないとは、と残念がる内容だ。この詩は新出の屏風によれば、岡田半江に寄せたものであることが分かる。画人の半江に寄せる詩なればこそ、感性を働かせた詩を賦したものと見える。

あるいは、「重九即時二首」の第一首には、「公卿洗はんと欲す世の泥淤、風流を愛せず簿書を愛す」とあり、世の中の不正をなくそうと頑張って働いている同僚たちは、重陽の節句も忘れて書類とにらめっこするばかりで、風流のかけらもない、と嘆く。こうした一面は従来描かれてきた大塩像を塗り替えるものではないだろうか。

また、「霖雨新たに霽れ歩を東郊に移す。東田南畝尽く潦水の患有るを観る、偶成」詩には、蓮の花を詠って「水より出でて紅顔一笑開く」という表現が見られ、宋代の女性塡詞作家李清照の「浣溪沙　閨情」に言う「繡面芙蓉一笑開く」を想起させる。わずかな例ではあるが、大塩が塡詞を読んでいた可能性を示唆するもので、もし、そうであるならば、当代随一の塡詞研究者であり、実作も能くした田能村竹田の影響を受けていたとも考えられる。

大塩が明代の画家趙之璧が描いた「蘆雁図」を頼山陽に請われて譲ったエピソードが知られている（頼山陽「大塩子起の蘆雁図を贈らるるに謝する歌」『山陽詩鈔』巻八）が、山陽、竹田、半江らに囲まれていた大塩の、文人らしい一面は看過できない。

まとめ

大塩平八郎については、従来、大坂町奉行所与力としての業績、『洗心洞箚記』をはじめとする陽明学者としての著述、天保八年の決起とそれに至る行動等から多面的に論じられてきた。その一方で、彼が残した詩賦は等閑視されてきたと言わざるを得ない。しかし、近世後期屈指の文人であった頼山陽、田能村竹田、篠崎小竹、岡田半江とともにあって、その詩は高いレベルを保っており、また、その表現からは、他の資料からは窺えない大塩の思想、感情、志、美意識を読み取ることができる。今後の大塩研究が、彼の詩を踏まえて行われていくことを願い、本研究で成した『洗心洞詩文』詩部の訳注を 2024 年内に公刊したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 福島　理子・宮内　淳子	４．巻 4
２．論文標題 幸田露伴「運命」論	５．発行年 2023年
３．雑誌名 帝塚山学院大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福島理子	４．巻 8
２．論文標題 小野十三郎、詩論の形成	５．発行年 2024年
３．雑誌名 帝塚山派文学学会紀要	６．最初と最後の頁 25－43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福島　理子	４．巻 43
２．論文標題 大塩平八郎　七言絶句二首軸について	５．発行年 2024年
３．雑誌名 混沌	６．最初と最後の頁 26－29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福島理子	４．巻 20
２．論文標題 朝顔好みと朝顔嫌いー殿村平右衛門と大塩平八郎ー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 上方文藝研究	６．最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福島理子、宮内淳子	４．巻 3
２．論文標題 幸田露伴『幽情記』論	５．発行年 2023年
３．雑誌名 帝塚山学院大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福島理子・宮内淳子	４．巻 2
２．論文標題 石川淳「二人権兵衛」論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 帝塚山学院大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福島理子	４．巻 68
２．論文標題 廣瀬旭荘の詩と書画	５．発行年 2022年
３．雑誌名 和漢比較文学	６．最初と最後の頁 17‐25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 福島理子
２．発表標題 廣瀬旭荘の詩と書画
３．学会等名 和漢比較文学会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

講演「文人大塩平八郎」第2回関西大学東京泊園塾「大塩平八郎を問う〜与力と文人の『反乱』〜」、於関西大学東京センター、2022年12月10日。 講演「詩に遊ぶ大塩ー新出資料が教えてくれること」令和5年度大塩中斎忌記念講演、大塩事件研究会、於成正寺。2023年3月25日。 「大塩平八郎　漢詩の掛け軸」『読売新聞』2023年4月29日朝刊。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関